

数が増加しており、審査員増員が必要になっています。一方JACR Monographを拡充するために、投稿論文が増えても対応できる審査と編集の体制を整える必要があります。学術委員会とモノグラフ編集委員会は、学術集会での行事では連携して活動を行っています。これらの実情や見通しを踏まえ、令和元年12月9日に開催された令和元年度第5回理事会で、令和2年7月1日発足の新しい理事会から、学術委員会とモノグラフ編集委員会を統合し、統合後の組織が学術委員会という名称を引き継ぐことが承認されました。

統合後の学術委員会は、学術委員会とモノグラフ編集委員会それぞれが所掌してきたすべての業務を引き継いだ上で、学術委員会の学術集会企画への参画を見直します。第21回学術集会(平成24年度、高知)から第26回学術集会(平成29年度、愛媛)までは、毎回、「学術委員会企画シンポジウム」が企画され開催されていました。学術委員会が、地域がん登録の領域で継続性があるテーマを設定して報告者を選定し、シンポジウムを主催していたのです。全国がん登録の開始、および

院内がん登録領域の会員の増加などを踏まえ、学術集会でのこの企画は終了しました。しかし、全国がん登録でも院内がん登録でも、年度を超えて継続的に議論しなければならない課題、あるいは会員の意向を把握したい新しい課題が増えています。新しい学術委員会は、毎回の学術集会で、継続性を考慮しながらタイムリーなテーマでシンポジウムを企画し主催することを復活する予定です。

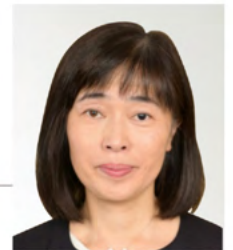
6月4～14日にWeb開催された第29回学術集会で、全国がん登録が定着したこれからは、全国がん登録資料を活用してがん対策の企画と評価に反映させることが重要であるとの認識が、会員の間で共有されました。しかし、全国がん登録資料の利活用は、事務手続きが煩雑なこともあり進んでいません。登録資料利用の手続きが必要な事項を押さえた上で簡素化され、実践でも研究でも資料の利用が促進されなければなりません。新しい学術委員会が学術集会シンポジウムを場として、登録資料利活用の促進においても積極的な提言を行う組織であることを願っています。

JACR委員会報告[教育研修委員会]

大木 いずみ JACR副理事長

栃木県立がんセンター

杉山裕美	放射線影響研究所	海崎泰治	福井県立病院
伊藤秀美	愛知県がんセンター	金村政輝	宮城県立がんセンター
寺本典弘	四国がんセンター		



教育研修委員会は、学術集会における実務者研修会の企画、総会時のがん登録実務功労者表彰、「がん登録の手引き」の刊行等を行っています。またIACR(国際がん登録協議会)からの情報提供として、今年度は「がん登録事業へのCOVID-19の影響に関する調査」への協力支援を行いました。

がん登録は「データを収集する」だけでなく、がん対策や研究に役立ち、かつ国際的にも通用する精度・質の高いデータを整備・維持し、さらには実際に活用していくことが求められています。仕組みが整っても今後はそれらを維持更新していくために、ますます幅広く様々な方法で日々教育研修委員会の活動を継続していかなければなりません。

がん登録は、正しく登録するために病理学の勉強や医学的な「がん」の知識が必要です。教育研修委員会ではそれらの情報を発信しています。また集計や報告書にまとめる方法なども情報共有しています。

全国がん登録は、法律のもとすべての病院等から正しくルールを知って提出いただけるように研修会が全国各地で開催されています。全国がん登録の研修会のあり方については、教育研修委員会で調査を行ったところ、共通する課題やそれぞれに対応して多くの工夫がなされていることがわかり、この度報告書にまとめました。

身近にがん登録のデータを整理・集計する立場からも、がん登録データががん対策への活用やがん研究利用に幅を広げて活動しています。学術集会の研修会では、弘前大学の松坂方士先生に「がん登録資料に基づく研究の進め方」を講義していただきました。

これからは、学術委員会、広報委員会、Japan Cancer Information Partnership(J-CIP)活動、国際委員会とも連携しながら、多方面からがん登録をサポートし、情報共有したいです。